

三陸海岸大津波

吉村昭著 文藝春秋 2004 (文春文庫)

関東大震災

吉村昭著 文藝春秋 2004 (文春文庫)



文学部准教授 野口 武悟

2011年3月11日。この日、東北地方の三陸沿岸から宮城・福島沿岸、そして関東地方の茨城・千葉沿岸を襲った大津波は、一瞬にして多くの尊い人命を奪い去った。どんなに強固な防潮堤があろうとも、高さ40メートル近くにまで達した大津波の前にはあまりにも無力であった。

大学時代に読んだ『三陸海岸大津波』で吉村昭(1927-2006)が述べていた一節が思い出された。第二次大戦後、三陸沿岸の田老町(現・宮古市)などでは、高さ10メートルほどの防潮堤の整備が進められた。「しかし、自然は、人間の想像をはるかに越えた姿を見せる」「明治二十九年、昭和八年の大津波は、一〇メートル以上の波高を記録した場所が多い」「そのような大津波が押し寄せれば、海水は高さ一〇メートルほどの防潮堤を越すことはまちがない」。不幸にして、この吉村の指摘は現実のものとなってしまった。過去の大津波の経験はなぜ活かされなかったのか。防潮堤という現代技術の前に、人々は安心してしまったのだろうか。いま読み返すと、改めて考えされることが多い。『三陸海岸大

津波』は、吉村が三陸沿岸を取材してまとめた記録文学(ルポルタージュ)であり、初めて単行本化されたのは1970(昭和45)年のことであった。

災害に関して、吉村は、『関東大震災』という作品も著している(最初の単行本化は1973年)。本書は、今から90年前の1923(大正12)年9月1日に発生した関東大震災をテーマとした歴史小説である。歴史小説とはいえ、史実の調査を緻密に行った上で著されており、記録文学的性格が強い。突如として災害に見舞われた人々はどう行動したのか、デマはなぜ瞬く間に流布したのかなど、本書から得られる現代的教訓は少なくない。

日本は災害大国といわれる。首都直下地震や南海トラフ巨大地震など、今から発生が危惧されているものも多い。私たちは、これから起こり得るかもしれない災害とどう向き合っていくたらよいのだろうか。考えるきっかけとなる本は、前述したもの以外にもたくさんある。こうしたテーマの本も敬遠せずに、ぜひ手にとって読んでみてほしい。